

6 学力向上アクションプラン

1 学校の状況と地域の実態

- (1) 昨年度までは「三感（感性・感化・感謝）」をテーマに共同研究を通して児童の学力向上を図ってきた。今年度はその成果をふまえ、子ども達の資質・能力を引き出すことをテーマにさらに学力向上を図っていく。
- (2) 特別支援教育の考え方にに基づき、「学びのユニバーサルデザイン化」を視野に入れた教育環境、授業改善を行っており、教職員の授業改善への意欲は徐々に育っている。
- (3) 経験6年以下の若年層が約半数を占める。校内OJTによる人材育成が指導力向上の鍵になると考える。
- (4) 小中連携・一貫教育の推進に向け、高田小・高田中との連携を進めるだけでなく、「共育のまち 高田プラン」の実現に向け、地域とのさらなる連携も進めている。

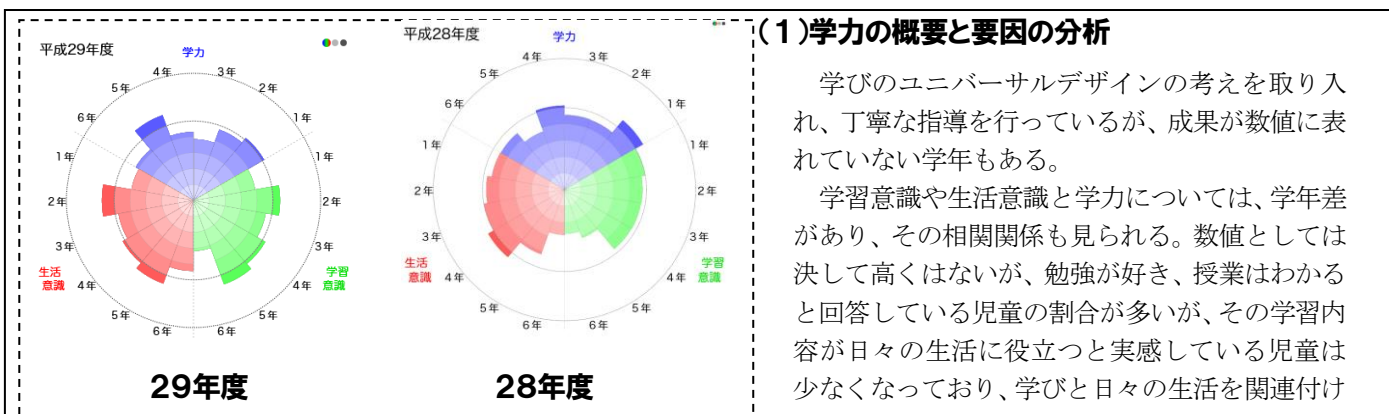
2 今後3年間の方向(中期学校経営方針)

(1) 学力向上重点目標「中期学校経営方針」

自分も他者の考えも大切にしながら自分の思いを積極的に伝え、表現することを大切にしながら、各教科における「見方・考え方」に直結する「感性」を育成する。

- ①特別支援教育を根拠にした指導を進め、どの子どもも「わかる」「できる」授業づくりに努める。
- ②「資質・能力育成ベースの授業づくり」を研究テーマとした研究を通して学びをつくりあげる姿を目指す。
- ③目指す子ども像を明確にし、資質・能力を育むプロセスを重視した授業づくりを推進する。

3 横浜市学力学習状況調査等からの平成28年度の実態把握



(2) 教科学習の状況

- 国語科：「基礎・基本」について課題がある。特に漢字は与えられた課題を覚えるだけでなく、繰り返し練習し覚えようとする態度を養い、意欲的に取り組めるような指導の改善が必要である。
- 社会科：学年差が大きい。総じて市平均程度である。「知識・理解」は比較的高いため、それを「思考・判断」と結びつける指導を行い、確かな知識・理解に質を高めていく必要がある。
- 算数科：学年が上がるに従って理解できない児童が増える傾向がある。「技能」の学年差が大きく市平均に達していない学年もある。思考・判断と技能の関連を図った指導の改善が必要である。
- 理 科：学年差が大きい。総じて市平均程度であるが、理科嫌いの割合が多い学年もある。興味・関心をさらに高める指導の改善が必要である。

(3) 経年変化の状況と要因の分析(学習・生活意識調査も含めて分析)

ここ数年の経年変化を見ると、全体的に学力・学習意識・生活意識がなだらかであるが向上しているが学年差も大きくなっていることがわかる。一人ひとりの子どもの実態に目を向け、「学びのユニバーサルデザイン化」に取り組んできたことが、徐々に結果に出てきていると考える。

さらに、教科を貫く汎用的な技能を学校として共通な考えで指導をしていくことで、学年差の解消につながると考える。また、何のために学んでいるのかということ、体験的に理解していくことが持続的に学び続け、学ぶことが楽しいという態度の育成につながると考える。

4 平成30年度 目標と 具体的方策

平成30年度 目標 「互いのよさに気づく感性を高め、共に学びをつくりあげる子の育成」

(1) 学校組織としての共通の取組

○ 「共に学び合う」学習の具現化

・共同研究の研究主題及び算数、国語、社会に視点をあてた授業改善を通して、共に学び合う授業を目指す。

○ 基礎的な学力の向上に関する取組

・「学びのユニバーサルデザイン化」によって基礎学力の向上を図る。

・子ども同士が共に学びをつくりあげることにより、互いに感化され、学力向上につながる。

○ 共同研究(校内研修)の時間の活用

・研究・研修の時間を確保し、共に学び合い共に成長し合える環境を整える。

(2) 学年・教科等としての取組

1 学年

○国語では、「読む」に課題があるので、基礎基本の学習に重点を置くだけでなく、読書や登場人物の心の動きについても指導していきたい。

○算数では、数の組み合わせカードや計算カードを用いた計算の習熟を図るだけでなく、日常生活との関連を重視した学習内容を盛り込みたい。

2 学年

○読書に親しみ、読むことを楽しむことのできる態度を育てる。相手意識をもち、自分の思いや考えを言葉で分かりやすく伝えたり、文章で表したりすることができるよう、ペアやグループ学習を多く取り入れる。

○基礎・基本に課題があるので繰り返しの学習から定着に結びつけたい、また考えたり、仲間と話し合ったりして試行錯誤して活動できる場や機会を保障し、成功に結び付く体験ができるようにする。

3 学年

○自分の思いや考えを、言葉や順序を選んで相手を意識した話し方で伝えることや、話の要点に気をつけて話を聞いたりまとめたりする活動を、国語を中心に行っていく。

○それぞれが異なる意見をもつことを認め、相手の意見を聞いたり、よさを見つけたりする活動を社会や総合等のグループ学習を中心に行っていく。

4 学年

○国語や社会・理科等の教科で、学習課程で学んだ知識や技能を習得するために一人ひとりの子どもに反復練習やスモールステップなどを活用し、知識理解するように促していきたい。また、自分の意見と関係付けながら共感したり、違う考えについて考えたりしながらお互いの施行を深めていく学習場面を各教科・領域で位置付ける。○順序を付けたり関連付けたりして考える学習を各教科・領域で計画的に行う。

5 学年

○各教科の既習事項を活用して文章を組み立てたり、自分の考えを整理して簡潔にまとめたりする活動を通して、書く力を付ける。算数においては反復練習を促し、学習内容の定着を図る。

○学習意識を高めるために、学習することの意味を大切に、学習したことと実際の生活を結び付けるようにする。また、できた喜びを感じさせ、自分自身に自信を付ける。

6 学年

○国語の学習では、読んだり書いたりすることを通して、自分の考えを言語化し、表現しようとする態度を育てていく。

○算数の学習では、算数のもつ魅力を感じられるように正しい答えを出すことだけではなく、そこまで至るプロセスを話し合うなどしながら、論理的思考力を育てる。

個別支援学級

○個別の支援計画・個別の指導計画に基づき、話し言葉、表情、行動、書き言葉など、発達段階や特性に応じた適切なコミュニケーション手段を積極的に活用する場面を設けるようにする。

○国語科をはじめとする各教科や、学校生活の中で、先生や友達の話の聞いたり、自分の思いを伝えたりする場を大切にし、それぞれの子どもの発達段階に応じた言語活動のスキルを身につけることができるようにする。

○学習環境の整備、指導方法の工夫をし、一人ひとりの子どもの「わかる」「できる」につながる授業を展開する。